

放 想 (二)

とほくなりいよよ戀しくなつかしく憎しと見れば  
いよよわすれぬ

まどろみし夢のなかなるひとときに吾ももとせ  
はすぎ來しものか

(一九古貞に同)  
歌あり

いのちよりいのち生れていくかへり花よりは名  
もうまれしものか

故しらずあすをおもへばうなだるるむねの重さ  
にこころおののく

殊更にくろき花などがざしけるわが十六のなみ  
だの日記

開かぬやう神のつくりし謎の鍵さびにしままに  
終へむわか世か

わだつみの底よりぬけし月のかげ大きかりしも  
わすられぬかな

露まるぶ小笹のうへの月かげもいのちありきと  
なみだながるる

瞬間はいなづまのごときたり去るその束の間を  
われ人にして生く

このうたのわがいとしさはみそか子の悔となみ  
だに生みし心地す

誰がためのいのちともなき年を経て春のいく度  
別れては來し

▽そなたほど似合ふはあらし口紅のうつくしさよ  
といひし君はも

▽このなみだいまのおもひにあらねどもその日の  
ごとくしみじみ泣かる

▽何ならぬ人のまなざし悲しくて世を狭うしぬあ  
る日あるとき

十五すぎなみだの色も紅うなりて我たらちねを  
恨みまつりし

▽われはしるつよき百千の戀ゆるにももちの仇は  
うれしきものと

▽わびぬれば名もなきものに手をつきてあやまら  
されしおそろしの夢

末つひにおもふとだにもいひあはぬすぐ世なれ  
ども忘れがたかり

一九六

わが我にあたへむとするは百年の後に生くべき  
物語ふみ

とほくなりいよよ戀しくなつかしく憎しと見れ  
ばいよよわすれぬ

何物も持たらぬものを女とやこの身ひとつもわ  
がものならぬ

花さきぬちりぬみのりぬこぼれぬと吾しらぬま  
に日経ぬ月経ぬ

さかくばかりしづかなる夜のあめつちに人の子な  
どかなみだ多かる

一九七

逢はざれば死別にも似る年を経てむねのおくつきとふ人もなし

天上の花のすがたとおもひしはかり寝のやどのまぼろしの影

月に吸はれ潮に満干のおもひとやかかのわだつみの久しかる戀

うつしよにありやあらずやあふといふちぎりはすでに死よりはかなし

✓船ゆけば一すぢしろき道のありわれにはつらくかなしびのあと

✓底しれぬこころのなやみ呪ふべくうたを綴れりわれといふ歌

追憶のとばりのかげにまぼろしの人などいれて  
けふもなかるる

あめつちの命の果もかぎりあれや二つのこころ  
終りをしらぬ

放 想 (三)

観世音寺ゆふべのかねに花散れば身も世もあら  
ずなかまほしけれ

あめつちのもろもろよりも尊かるきみが命とお  
もひそめてき

いつしかも小町櫻のさきかへる春としなればお  
もひいづるもの

七つ星北のそらなるかりがねの鳴く日となれば  
またなげかるる

白桃はちれどもちれど散りやますわが愁にもな  
みだにも似て

むしの音ようき身の数は十六夜いざよひのあまり戀しき  
ゆふぐれのそら

秋くればわりなく人の憎まるるこのいくとせの  
なれしかなしみ

何物も持たぬこの身の重荷たるわれはわが身を  
いかにかすべき

灯の色はとほくみだれて秋雨のふるやなみだに  
見たる乳母が家

むづかしき人の世つらし夢にだにおもふがま  
まにわれをなさしめ

わがためにこよひの月はおぼろ夜に似るとな  
みだす人は誰が子ぞ

この世をば限りとおもひなみだしてありし昔の  
おろかなるわれ

おもひなく何も願はで日はくれぬなにも思は  
でこよひはたぬる

われをうらむ人のことづてたのまれし四國めぐ  
りの船のかなしも



月はめぐるこのわが踏めるおほつちにわれてう  
ものありとし知るや

かひもなく吾とわが身をせめつつも鞭うちつつ  
もおとろへにけり

日輪のなないろよりもいや奇しきこころの彩を  
わかちかねつる

何をうらむなにをかなしむくろかみは夜半の寝  
ざめにさめざめと哭く

誰か似る泣けよ歌へよとあやさるる緋總の籠の  
うつくしき鳥

とこしへにきみが名よはし松風は袖のみなとに  
音をたゆるよも

一を二とよむすべしらすらざればちゑたらぬ  
子とかろしめらるる

旅に来て姉のみとりの甘やかななぐさみほどの  
いたつきをする

あまえてはすこしの無理も云ひて見つみちたら  
ひぬるかろきこころに

なにをまつ誰まつときを待つとてもこころ足る  
日のなしとしるしる

奈良の鹿はやさしき目してもの古りしとうろう  
のかげに吾を見まもる

ます鏡なれしかゞみよ十八の春もしるらむはた  
ちの秋も

誰に言ひ誰に聞えむすべもなき泪の糧かたにわが歌  
はなる

流  
轉  
終

集後小記

この歌集を流轉と名づけました。考へて見ると『流轉』とは本當に今の私の歌集にはふさはしい名です。私の最初の歌集である『踏繪』から『几帳のかげ』とそれから『紫の梅』と共に次々に經て來た私の流轉の生涯はとりもなほさずこの歌集流轉なのです。それ故にこの歌集は踏繪頃の時代から現在の私に至る迄のすべての氣持を物語るものと思ひます。苛けられた運命に盲従しつゝ、生きなければならなかつた頃か

ら、それから遁れ出での苦闘の巷へ、そして只今は二人の兒達の母親となつて、それ等のものゝ行先を見やうとしてゐる私の比較的落ちついた今日の境遇までを歌の世界に寄せて見たものが即ちこの歌集であります。素より歌としてのよしあしに就いてはそれはこの集を讀んで下さる方々の心とりどりとはい思ひますが、然しこの集の中の歌はすべて私にとつてはたとへど一首のものにしる限りなき感慨と思ひ出の種ならぬはありません。私としては只この私のこうした氣持がこの歌集を手にして下さる方々の胸の中へ行く事が

出来ましたならそれを以て何よりの心やりともし又幸でもあるとします。

始めこの歌集を編むに當つて、出来得る事なら多少の暇を得て、作歌の順序について心覚えのことなどを訂したり、又聊かにしても歌に對する取捨をも試みやうかとは思ひましたが、恰かもこの詠草を整理しなければならなかつた頃は最も多忙の折柄でありましたのでとうとうそんな事も心構のみで實行する事が出来ませんでした。それ故集の中には歌として杜撰なものがあることゝは思ひますが之は私として

は洵に餘儀ない結果でありましたのでこの點は深く皆様の御赦しを乞ひ度いと存じてゐます。

因にこの歌集の表紙に用ひた装幀意匠は不二書房主の石川さんが名物本願寺色紙三十六歌仙のもの、中よりたしか源重之朝臣の分を撰んで下さつたものです。私としても氣に入つたもので大變に心持よく感じて居ります。

昭和三年四月花まつりの日

柳原燐子

昭和三年六月廿五日發行

定價貳圓四拾錢



轉流

著者 柳原燐子

發行者 石川清晴

印刷者 白井赫太郎  
東京市神田區錦町三ノ十七

發行所

東京市牛込區  
喜久井町二十九番地

不二書房

振替東京七四四六四番

電話牛込五五六番

學習院元教授 福井久藏著

# 大日本歌學史

四六版六三〇頁  
天金極製美本  
寫真十數葉挿入  
定價參閱拾八錢  
送料書留拾八錢

本書は寧樂時代より明治の終に至る壹千有餘年間に於ける我が歌學の起原及其の發達、沿革に就いて詳述したるものであります。然して其論述に當つては各時期各年代に介在した多くの歌人、歌學者等の作歌並に論唱、著作物に對して充分なる藝術的關心を拂ひつつ一方又其等に就いて剴切明快なる學的批判を加へたものであります。

從來我々は此の短歌に對する歌學史的論述や研究に就いては現在の所三、四の國文學者の著作に成る國文學史の類に依つてのみ僅かに其の管見を成し得るに過ぎず、之が爲め、我々は我が國民文學諸種の胚胎を成し來つた短歌の藝術的手法の變轉や歸嚮、或ひは之の世界よりして考察せらる可き各時代の國民的な藝術性情等に就いては更に

何等の據る可き材料をも、觀察點をも與へらるる事が無いのであります。

況んや古來より現代へかけて勃興した幾多無數の作歌上の流派の消長並に之が相互關係に對する史的事實等に就いては全く幾何もの記述をも見ないのであります。之は明かに現今作歌に携はる人々は素より國文學の研究者に取つても非常なる不便であつた事と存じます。本書は如上の意味よりして我國に生れた實に最初にして又最も完全なる歌學史であります。因に本書は昨年度中に於けるあらゆる出版物中最も精讀せられたる書籍十六種中の一として大日本圖書館協會より推薦せられたるものであります。

## 内容見本贈呈

賜 天 覽  
臺 覽

不二書房版

學習院元教授 福井久藏著

# 枕詞の研究と釋義

菊版八百餘頁  
天金染布裝幀  
定價六圓八拾錢  
送料書留金拾六錢

我國の枕詞は世界の言語學上に於ける一つの特異なる形式であつて、海外の學者に依つて夙くより研究されつつあるものであります。夫にも不拘我國に於ては未だ其研究上並に註釋上の立場よりして之に集大成を行つた文獻は一つも有りません。其證據として現在我國が有する如何なる國語辭典に據るも、枕詞の語彙的採録の範圍の貧しきは固より、凡そ之が研究註釋に對しては我々は到底満足なる解答を求むる事が出来な程であります。之は我國國文の研究解釋乃至は古來よりの短歌の研究又は現在作歌等の場合から言つても、惹いては我國文學獨特の表現を味はう點から言つても頗る遺憾な事と申さればなりませぬが、是等の諸點は遂に本書の刊行を以て完全に掃去せらるるものと信じます。

本書の編成に就いては、第一編に於て汎く古人の研究の跡を探り第二編に於て更に著者の研究を述べて枕詞に關する研究史を完成し、第四編に至つてはあらゆる枕詞を採録して之が用例典籍及其所載書名と其場所とを明かにし、掛り詞の悉くを列擧し、一語の研究毎に古人の解説を掲げ、而かも常に數首の用例證紙を附して之にも用例出典及其所在卷數を示して完全なる枕詞の辭典を作成し、尙又之が研究解釋に些細の遺漏なきを期するが爲め三種の年表索引をも編纂致してあります。

## 内容見本贈呈

賜  
天覽  
臺覽

不二書房版

1628

吉井 勇 著

歌もの 生ひ立ちの記

四六版 天金  
木版 刷極美製本  
定價 二圓三拾錢

本書は著者が若かりし頃の生ひ立ちの様を歌物語として綴つた叙情史的作品である。劇作家として同氏が持つ獨特な味は、亦隨筆的作品の中に見る同氏の人間としての心境、將又歌人としての叙情詩的な藝術的境地には何れにも既に定評があつて敢て亦岷々を要しないものであるが、この生ひ立ちの記は氏に取つては略々その叙情詩的作品の方面での最初のものであると信ずる。

凡そ藝術家たるの人々にとつては、藝術の芽生えは多くその人々の叙情詩的世界に根ざすものが多い。然しかうした境地は多くそれ／＼の個人が比較的成長し了つた時に於て兎角に輕んじられ易い性質のもので時々それ等の追憶が何かの拍子に頭を擡げる事があつても人々は強いて之を重んずる事を我から拒否し勝ちなものであるが藝術家として勝れたるこの著者は一通りならぬ愛著を以て自己の過去の叙情詩的時代を追憶してゐる。よく考へて見るとすべての人々にとつてそうであるが如くに一人一人の幼かりし頃の思ひ出は洵に何時思ひ浮べて見ても限りなく美しく貴く而かも且つあはれなものである。そして最も純な自己の面影を最も正確に物語るものであるに相違ない。願はくば藝術家として而して人として最も獨特な力と魅力とを持つこの作家のそれを以てして各々その生ひ立ちの頃を而して叙情詩の時代を今一度切に思ひ起されん事を。その時に於ては忘れたるものゝ影、見殘したる夢の教々、扱ては亦自己を今日へ誘ひ來つた道の跡などが限りなく思ひ返されて來て極めて安らかな氣分の一時がある事を信じて疑はない。

不二書房 版



~~582~~  
~~55~~

911.168  
Y53  
2

終

